

## 平成30年度 学生海外研修報告書 (担当教員)

鹿児島大学長 殿

授業担当者

所属/職名: グローバルセンター/特任講師

氏 名: 福富 渉

授業科目名	社会システム・政策研究(タイ研修)
研修先(国・地域) 滞在地	チェンマイ大学、ブーラパー大学 他(タイ・チェンマイ、パッタヤー、バンコク)
研修期間	平成30年9月16日～平成30年9月28日
<p>〔研修の成果〕</p> <p>上記日程で、タイへの海外研修を実施した。法文学部、工学部、農学部から、1年生～4年生まで、8名の参加があった。本研修のプログラムを大別すると、以下のようになる。(1)現地大学生との交流(2)政治・社会・歴史フィールドワーク(3)政治関連インタビュー(4)現地日系企業・日本大使館訪問。以下、一項目ずつ記す。</p> <p>(1)現地大学生との交流</p> <p>概要: タイ国立チェンマイ大学日本語学科およびタイ国立ブーラパー大学日本語学科との交流会を、それぞれ実施した。チェンマイ大学(サランヤー・コンチット教員)からは11名、ブーラパー大学(ナンチャヤー・マハーカン教員)からは31名の参加があった。交流会の司会進行は日本語・タイ語の2言語でおこなわれ、学生間のプレゼンテーションと交流は、日本語で進行した。</p> <p>チェンマイ大学においては、鹿児島大学の学生が5グループに分かれ、鹿児島大学の紹介・鹿児島県の歴史・鹿児島県の観光(温泉・灰)・鹿児島県の言語・鹿児島県の女性進出というプレゼンテーションをおこなった。それぞれの発表について、チェンマイ大学の学生がタイ語への逐次通訳をおこなう形で、授業が進行していった。</p> <p>ブーラパー大学では、あらかじめ決めておいたグループに分かれ、グループごとに準備してきたプレゼンテーションを相互におこなった。このグループは、鹿児島大学の学生1名に対して、ブーラパー大学の学生2～4名というグループであった。</p> <p>両大学で、授業時間終了後に自由時間を設定し、チェンマイ大学では有志学生が昼食会およびキャンパスツアーを開催していただき、ブーラパー大学ではそれぞれが会話を続けて、交流を深めた。</p> <p>成果・反省: チェンマイ大学およびブーラパー大学の両校において、鹿児島大学学生によるプレゼンテーションのテーマの基礎は「鹿児島」に置かれていた。今回の研修参加学生は多くが県外出身者で構成されていた。地域についての理解が浅い中、予備知識をもたない外国人にもわかりやすいプレゼンテーションをどのように構成し、発表するかという点に注力し、準備作業を進めた。結果として、効果的なプレゼンテーションと相互学習の場が構築できた。鹿児島大学の学生は、プレゼンテーションを日本語で実施した。これは、交流先両大学学生の日本語能力の高さに大いに依存するものである。未修語であるタイ語でのプレゼンテーションは事実上不可能であるのは仕方ないにしろ、相手は外国語である日本語を使用し、こちらは母語の日本語を使用するというアンバランスな状況、それにもかかわらず自らの語る内容を十分に構成できないというもどかしさから、自身の普段の学習態度や日本語能力について、大いに反省するところがあったようだ。</p> <p>また、チェンマイ大学では、日本各地の大学から現地に留学し、タイ語を学ぶ日本人学生とも交流することができた。「日本からタイ語を学びにタイに渡る日本人」という存在そのもの</p>	

## 平成30年度 学生海外研修報告書 (担当教員)

鹿児島大学長 殿

授業担当者

所属/職名: グローバルセンター/特任講師

氏 名: 福富 渉

授業科目名	社会システム・政策研究(タイ研修)
研修先(国・地域) 滞在地	チェンマイ大学、ブーラパー大学 他(タイ・チェンマイ、パッタヤー、バンコク)
研修期間	平成30年9月16日～平成30年9月28日

が、鹿児島大学の学生には新鮮だったようで、その学習姿勢やモチベーションから学ぶものがあつたようだ。またこれらの出会いが、無意識のうちに東南アジアを下に見る自らのステレオタイプをあぶり出すことにもなつたようだ。

## (2)政治・社会・歴史フィールドワーク

## 概要:

担当教員の案内により、渡航先であるタイの政治・社会・歴史のそれぞれのテーマについて、フィールドワークをおこなつた。

政治フィールドワークでは、2010年4月～5月にかけてバンコク市街で発生した民主化デモと、その参加者が軍・警察から構成される治安部隊によって強制排除された現場を歩いた。また別日にはバンコク旧市街を訪れ、1973年10月に大学生を中心に実施された大規模な民主化運動の跡地・記念碑を周り、その運動が過激化した結果、1976年10月に多くの大学生が軍によって虐殺された事件の跡地を巡つた。担当教員の用意した当時の画像・動画・音声を現場で視聴しながらフィールドワークを続けた。

社会フィールドワークでは、北部チェンマイ県のマイイアム現代美術館にて、展示“DIASPORA: Exit, Exile, Exodus of Southeast Asia”を鑑賞した。東南アジアにおける移民労働者をテーマとした作品が多く展示されており、担当教員による解説を交えて、作品とその社会的背景の理解に努めた。また別日に東部チョンブリー県のパッタヤー特別市を訪れた。もとは漁村だったパッタヤーだが、現在では世界最大級の歓楽街・風俗街となっている。その変化・都市形成には、冷戦構造・ベトナム戦争における東南アジアと米国の関係や、日本による東南アジアへの開発援助、タイ国内の地方格差が大きな影響を与えている。教員が細かく解説を与えながら、実際の歓楽街を歩いた。

歴史フィールドワークでは、中部アユッタヤー県の日本人村跡地を訪れた。15世紀、東南アジア最大の交易都市であったアユッタヤーには、最大1,500人も日本人から構成される日本人集落が形成されていたと言われている。そこから当時の王族に重用される人物も現れ、日本人の存在は、多民族交易国家アユッタヤーの軍事面において大きなプレゼンスを発揮していた。日タイの交易は600年の歴史をもつと言われており、その原初の点となる場所を訪れ、年表や種々の展示品を確認した。

## 成果・反省:

どのテーマについても、学生が、現場で学習する問題を「タイ/東南アジア固有の問題」に収斂させて理解することのないよう、細心の注意を払つた。学生・若者の政治参加、暴力、外国人労働者、開発、格差、女性の権利といった論点について、日本およびその他の国における同様の問題を提示し、比較し、学生たちとの議論をおこなつた。結果として、学生たちが、すべての問題を、自身と関わりのある問題であると認識・想像することができるようになったように見える。本研修の本質的な目標は、タイに関する知識を身につけることではなく、あらゆる問題・事象を、自分自身・自分自身が生きる地域にも関連しうるものとして考える想像力を養うことにあつたため、その点では成果が上がつたと言えるだろう。

理想を言えば、事前学習をより濃密なものとするれば、もっと効率的・効果的なフィールドワー

## 平成30年度 学生海外研修報告書 (担当教員)

鹿児島大学長 殿

授業担当者

所属/職名: グローバルセンター/特任講師

氏 名: 福富 渉

授業科目名	社会システム・政策研究(タイ研修)
研修先(国・地域) 滞在地	チェンマイ大学、ブーラパー大学 他(タイ・チェンマイ、パッタヤー、バンコク)
研修期間	平成30年9月16日～平成30年9月28日

クがおこなえたかもしれない。ただ、すべてのテーマについて十全な学習をあらかじめおこなうことは、現実的な困難が伴うだろうし、現地に赴いてはじめて実感できることも多くあるだろう。来年度以降にどのような事前学習を設定した上で研修に赴くか、検討を続ける。

## (3) 政治関連インタビュー

概要:

2014年の軍事クーデター以降、タイは軍事独裁政権の統治下にある。日常を送ったり、観光に訪れたりする上ではなんらの危険もないが、政治的な活動や言論には、厳しい統制が敷かれている。今回の研修では、軍事独裁政権下において、異なるアプローチから民主化を目指す2つの団体を訪れ、インタビューをおこなった。

1つ目は、北部チェンマイ県の独立系書店Book Re:Publicだ。この書店では、客として訪れる大学生や若者を主なターゲットに、批判的思考力を醸成することを目的としたさまざまなワークショップや、トークイベントを開催している。書店の共同オーナーであるロッチャレーク・ワッタナパーニット氏は、軍事政権による拘束・脅迫・監視を受けながらも活動を続けており、2016年にアメリカ国務省から、タイ人として初めて「国際勇気ある女性賞」を受賞した。ロッチャレーク氏を中心に、20代の若手スタッフ2名を加えて、書店の来歴、書店で実施されているワークショップの詳細や、本人たちの思想について、話を伺った。

2つ目は、2018年に設立された政党である、Future Forward Party(新しい未来の党、FFP)だ。タイでは、21世紀に入ってから激化の一途をたどるリベラル・民主派と保守・王党派の対立が、2014年の軍事クーデターを引き起こした。軍事政権が2019年の選挙実施を発表し、既存勢力とは異なる政治勢力が多く誕生している。FFPは、自動車部品メーカーの経営に携わっていたタナートン・チュンルンアンキット氏が、社会民主主義的な政策と、リベラルな価値観の醸成、市民全員の政治参加による国家運営を訴えて設立した党だ。バンコク市内にある党本部を訪れ、副党首のロナウィット・ロールルートストーン氏と、20代の若手党員4名から、党設立の理念や活動内容についてのプレゼンテーションを受けたあと、ディスカッション、インタビューをおこなった。

成果・反省:

日本の若年層の政治・社会参加の意識が低いことが問題とされている。研修参加者もその例にもれず、ほとんどの学生が、研修参加前、政治的な問題は、自身の人生と「関係のない」ものであると考えていた。

だが2ヶ所でのインタビューを経て、その認識には大きな変化が起きたようだ。各団体の活動もさることながら、そこに参加している自分たちと同年代の若者が、政治的関心をもつことが市民社会の成員にとっては至極当然のことであると認識・行動・生活していることに、大きな衝撃を受けていた。対話を通じて、自らが政治に無関心であったことを自覚し、その無関心は、あくまで社会的・家庭的な環境や教育の中で育まれてきたものにすぎない、ということへの気づきが生まれた。大学生の日常に関わる多くの出来事(アルバイト、奨学金、就職活動)すら、政治的な要因によって決定されているという事実を認識した上で、生活のすべてに政治が関わっていること、政治とは本質的には政党政治や代議制を指すのでは

## 平成30年度 学生海外研修報告書 (担当教員)

鹿児島大学長 殿

授業担当者

所属/職名: グローバルセンター/特任講師

氏 名: 福富 渉

授業科目名	社会システム・政策研究(タイ研修)
研修先(国・地域) 滞在地	チェンマイ大学、ブーラパー大学 他(タイ・チェンマイ、パッタヤー、バンコク)
研修期間	平成30年9月16日～平成30年9月28日

なく、他者と共生することそのものであるということを実感するようになったという点では、単にタイの政治状況について学ぶという以上に、大きな成果があったと言えるだろう。反省点を挙げるとすれば、今回話を聞いた団体は、すべて自由主義的、多文化主義でリベラルな価値観をもつ人々から構成されていた。タイ国内で起きている国民の分断、左右両派の対立は、現代における全世界的問題であるといえる。その意味では、一定程度の保守思想を標榜するような人々との対話も必要であったかもしれない。今後の研修運営における課題としたい。

## (4) 現地日系企業・日本大使館訪問

## 概要:

本学農学部および大学院農学研究科で開講されている「食料環境システム学」の海外研修チームと合流して、タイ中部アユッタヤー県にある、タイ味の素社の工場を訪問した。同社の日本人従業員の方より、タイ味の素の業務内容や、特にうまみ調味料(MGS)の製造工程に関するレクチャーを受けた。その後、工場内作業ラインの見学をおこなった。

また別日に、在タイ日本大使館を訪問した。広報文化部一等書記官の久芳全晴氏および政務部専門調査員の宇戸優美子氏から、大使館の主要業務や、日タイ関係に関するレクチャーを受けた。

## 成果・反省:

両訪問とも、研修後半に実施した。研修前半のフィールドワークやインタビューが、社会や国家を構成する「個人」の視点や感情に触れるものであったとしたら、この両訪問は、その対極に立つ「組織」や「国家」の論理や思考に触れるものであったと言えるだろう。その意味では、大変効果的な訪問となった。

タイ味の素社での講義は、農学部の学生を対象とした、うまみ調味料の精製と品質管理に関する専門的な内容が多かった。その一方で本研修の参加学生は、工場内での労働者の労働環境や、日本人従業員とタイ人従業員のあいだに存在する差や、その差に対する各従業員の認識など、さまざまな観点から疑問をもち、それを議論していた。

日本大使館においても同様で、あくまで「日本国」というひとつの国家を代表する立場の機関から発される言葉や視点は、研修参加学生たちがそれまで触れていたものとは異なるものであった。そのギャップゆえに、今後自らが社会の成員として生きていく上で、自分を社会のどの場所に位置づけるべきか、どのように社会と関わっていくべきかという、問いの機会になったようだ。

研修全体のバランスを考えると、この(4)のプログラムも重要な役割を果たしたと言える。ただ今回の研修では、たまたま農学部の研修と実施期間が重複したことや、大使館に知己の人間が在職していたことから、このような訪問が容易に可能になった。次回以降、同様のプログラムを安定的・継続的に実施していく方法を考えなくてはならない。

## (5) その他

参加学生の多くが、本研修をきわめて有意義な体験だったと回顧している。単なる海外経

## 平成30年度 学生海外研修報告書 (担当教員)

鹿児島大学長 殿

授業担当者

所属/職名: グローバルセンター/特任講師

氏 名: 福富 渉

授業科目名	社会システム・政策研究(タイ研修)
研修先(国・地域) 滞在地	チェンマイ大学、ブーラパー大学 他(タイ・チェンマイ、パッタヤー、バンコク)
研修期間	平成30年9月16日～平成30年9月28日
<p>験としてだけではなく、自身が社会の構成員としてどのように生きるかということをも自問する機会になった、今後ますますの学びを続けていかなければならないと、多くの学生が述べている。</p> <p>担当教員はタイの地域研究を専門としている。そのため、通訳も含めたあらゆるコーディネートを比較的容易かつ効果的におこなうことができた。自身の専門領域を、初年次を中心とした基礎教育にどう応用していくかという点で、今回の研修は興味深い実践となった。</p>	
<p>〔今後の課題〕</p> <p>(1)旅程と体調の管理 海外経験の比較的多い教員と、海外経験のほとんどない学生のあいだの、慣れや体力の差を十分に考慮して研修の旅程を計画した。1日に2つ以上のプログラムは設定しないよう心がけた。しかし、日本よりも広大な国土の中の4都市を、空路と陸路を駆使してわずか10日あまりで移動したことは、こちらの想定を越えて、多少の身体的な負担を感じることもあったようだ。そのため、中日にはほとんどプログラムを設定しない日も設けた。次回以降も、うまく休憩時間をはさみつつ運営をおこないたい。</p> <p>(2)タイ語学習 事前学習において、現地の公用語であるタイ語の学習をする時間が十分にとれなかったことが、反省点として挙げられる。タイ語は読み書きの学習に非常に時間がかかる一方、会話の難易度はそこまで高いものではない。もちろんすべての学生が簡単な自己紹介程度のタイ語は身につけていったが、もう少しでも会話のバリエーションが増やせれば、滞在がもっと彩りのあるものになったのではないだろうか。次回以降の課題としたい。</p>	